



Title	平成七年度博士論文(課程)要旨
Author(s)	
Citation	大阪大学文学部紀要. 1997, 37, p. 31-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6421
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平成七年度博士論文（課程）要旨

日本語疑問文における判断の諸相

安達 太郎

日本語は話し手の事態に対する認識や情報の入手の仕方といったものを言語形式や文法現象に反映させることが多い。これは、モダリティの研究として平叙文の文末を中心に注目されてきたが、本論文の目的はそのような観点を疑問文の分析に適応することにある。これによって、広義のモダリティ研究の文脈の中で疑問文に関わる諸問題を捉えることが可能になってくる。

この論文を通しての課題は次の三点にまとめることができる。

一、聞き手から情報を引き出すさいに、話し手の「判断」は文中にどのように投影されるのか。

二、平叙文において語彙化された「判断」としての認識的モダリティの形式がどのようにして疑問文の中に実現されるのか。

三、文の意味階層において、伝達のレベルから認識的モダリティの属する判断のレベルへ、あるいはその逆方向へのレベルの移行。

第一の課題については、否定疑問文が持つ、一定の判断への指

向性(「傾き(bias)」)という現象を取り上げた(第5章)。

話し手が聞き手から情報を引き出すようにするさいに、意味的には等価であると考えられる肯定疑問文でなく否定疑問文を用いるのには、なんらかの動機が必要である。この動機の一つとなるのが「傾き」であるが、ここでは「傾き」を疑問文での「判断」の実現の一現象として捉えることを主張した。さらに、「傾き」が文の意味としてどのような条件がそろったときに成立するのかわかることを検討し、これを手がかりとして、「傾き」のタイプ、対話における否定疑問文の使用条件について言及した。

第二の課題としては、疑問文の低位類型の一つである確認要求表現の特徴に対して検討を加えた(第6章、第7章)。

確認要求は、不確定性条件と問いかけ性条件という疑問文の二つの成立条件のうち、命題内容が不確定的であるという条件が欠落したものと考えられる。ここから、「デハナイカ」と「ダロウ」という確認要求の形式内部に認識的モダリティの形式がどのようなかたちで実現することができるかを検討することを通して、二つの形式の機能の相違に考察を進めた。ここから示されることは、「デハナイカ」はすでに疑問文としての性質を失っているのに対して、「ダロウ」は疑問文としての性質を持って機能しているということである。「デハナイカ」の聞き手の知識活性化機能の派生のメカニズムからもこの分析の妥当性が示される。

第三の課題に関しては、疑問文から平叙文への移行（第3章、第4章）と、平叙文から疑問文への移行（第8章）という二つの可能性が考えられる。本論文でも双方向から現象を捉えることを試みた。

前者としては、否定疑問文や「ノデハナイカ」といった形式が、聞き手から情報を引き出すという機能（情報要求機能）を脱して、聞き手に情報を与える機能（情報提供機能）を獲得することがあることを明らかにした。そして、このような機能の転換を可能にする条件として、これらの裏に話し手の判断としての「傾き」の存在が鍵になることを論じた。聞き手に情報を与える表現としての「ノデハナイカ」の意味特徴もここから派生されるものと考えられる。

後者としては、「ダロウ」の推量としての意味と確認要求としての意味を連続的に捉えることから、「ダロウ」の機能の全体像を把握することを試みた。この観点にとって手がかりになるのは、文法カテゴリーとしての丁寧さの分出であり、これにしたがって、「ダロウ」の意味は判断レベル、中間段階としての判断・伝達レベル、伝達レベルという三段階として、連続的に分析されることを示した。

中世着色画屏風の研究

——東京国立博物館所蔵「浜松図屏風」を中心に

泉 万里

本稿では、「浜松図屏風」（東京国立博物館蔵、以下「浜松図」と略記する）の検討をとおして、中世着色画屏風の世界の一端を把握することを試みた。

本図を巡る先行研究を概観し、土佐光茂、もしくはその周辺の絵師の筆になる一六世紀前半から半ばごろの作例と位置づけられてきたことを確認することから第一章を始めた。そのうえで、以下の各章では、「浜松図」の特質を列挙しつつ、その意味と成立および展開を中世着色画屏風全体を視野にいれながら検討した。

第二章では、「浜松図」が雲母引きを施した紙で作られた雲母地屏風である点に注目し、その意味と成立過程を考察した。その結果雲母地屏風は、雲母引きの紙（唐紙）が絹のような光沢を備えているところから、絹屏風の代用品として作られてきたものであることを推測し、一三世紀以降の絵巻の画の中にも、唐紙製の屏風とおぼしきものが散見されることを指摘した。「浜松図」をは

じめとする室町時代の雲母地屏風は、一三世紀の文献に「唐紙屏風」と記載されている紙屏風の系譜に連なるものといえる。さらに雲母地屏風を三分類した。それは、屏風の紙表から、絹のような光沢が失われてゆく三段階に相当する。その結果「浜松図」は、雲母地の露出度が高い雲母地屏風一類に分類されるものの、銀を使用しない点で、同じ一類に分類される「四季花木図屏風」（出光美術館蔵）などとは別の傾向を見せていることが明らかになった。この違い、すなわち、「浜松図」が金のみで装飾されていることをどのように解釈すべきかという問題意識をもって、第三章では屏風における金銀装飾の成立と展開の把握を試みた。

屏風画面の装飾に金銀が使用されていたことは、一三世紀の禁制の文言からも窺えるが、「金屏風」「銀屏風」などというような金銀装飾がなされていたことを明示する呼称を一四世紀までの文献に見ることはできない。ところが、一五世紀の日明交易の開始とともに、にわかに金や銀を冠した呼称で記録される屏風が続出し、一五世紀の絵巻の画中画資料の検索によっても金銀を多用した屏風を多数確認できるようになる。あきらかに屏風の金銀装飾は一五世紀に大きな転換期を迎えたといえる。その転換の要因として、次の二点を検討した。ひとつは、絵画をとりまく状況に外在する要因であり、もうひとつは日本絵画に内在する要因である。具体的には、前者は日明交易における中国側の期待を反映した輸

出用金銀屏風の制作であり、後者は日本絵画における雲霞と背地の特殊性である。雲霞と背地が絵画の世界から遊離し、金銀装飾の場と化し、やがては金属板を思わせるような金箔並べ貼りの手法が用いられるようになる。この雲霞と背地の展開史のなかで一五世紀は大きな飛躍の時期に当たっていたと思われる。「浜松図」をはじめとする中世着色画屏風にみる多彩な金銀の雲霞は、金箔並べ貼りへ至るまでの過渡的様相ととらえることができる。

さらに、「浜松図」の雲霞の特殊な形態に注目し、その成立と展開の様相を、料紙装飾や画中画資料、扇面画などを検討し把握した。

最後の第四章では、「浜松図」の小鳥と人物を取り上げ、ほかの作例との比較や、そこに込められている吉祥の意味の解説を試みた。

以上のような考察を踏まえて、「浜松図」の制作者および制作時期を再考し、従来いわれてきた土佐光茂周辺の絵師による一六世紀の作例という説が根拠の希薄なものであることを指摘した。しかし、遺憾ながら、この考察によって制作時期や筆者の確固たる手がかりが得られたわけではない。むしろ、「浜松図」に導かれるままに、様式史的編年をたやすくは受け付けない中世着色画屏風の混沌とした世界の一端を把握したことをもって本稿の成果としたい。

唐事の能の研究

王 冬 蘭

本論文は唐事の能（中国物の能）の出典をめぐる研究である。全体は序論と七つの章で構成されている。

序章「唐事の能の概況」は、唐事の能についての総論とも言うべき章である。唐事の能を定義し、唐事の能はおよそ二四〇曲ある現行曲中では二三曲、廃曲（非現行曲）では七〇曲ほどにのぼるとする。廃曲の唐事の能については分類し、近世の文学や社会との関連について述べる。

第一章「能「呂后」と『前漢書平話』」は、観世弥次郎長俊の作で、これまでは不明だった「呂后」の典拠が元代に刊行された『前漢書平話』であることを指摘し、『前漢書平話』と「呂后」の詞章、構成、演出比較して、典拠との関係を整理し、室町後期における能の素材の広がり、当時の能の作者の漢籍教養などにもおよんだ研究である。

第二章「能「楊貴妃」の典拠——『長恨歌』『長恨歌序』『長恨歌伝』の伝本をめぐる——」は、金春禪竹の作「楊貴妃」の典

拠とされている『長恨歌』『長恨歌序』『長恨歌伝』について、それぞれそのテキストというレベルで依拠関係を検討した論考である。能「楊貴妃」が依拠した伝本は、『長恨歌』のテキスト間で言葉の異同があることによって、正安二年写本であろうと指摘している。

第三章「慶長九年豊国社臨時祭の新作能「孫思邈」の出典」は、慶長九年に豊国神社で催された豊臣秀吉の七回忌に上演された新作能「孫思邈」の出典についての論考である。孫思邈について、多くの和漢の文献にその事績が記されているが、筆者は能「孫思邈」の直接の典拠として、唐の沈汾撰の伝記集『続仙伝』であることを指摘している。こうして新たに判明した典拠にもとづいて、従来の詞章の注釈の誤りも指摘している。

第四章「新作能の競演——慶長九年豊国社臨時祭の新作能をめぐる——」は慶長九年の豊国社臨時祭における新作能のうち、「孫思邈」以外の「武王」「橘」「太子」の典拠をめぐる論である。まず観世座が演じた「武王」については、『史記』の「周本記」が典拠であることを指摘し、また能「武王」のテキストにおける地名や人名の誤りについても論じている。「橘」については、先行曲「巴園」があるが、構成や詞章について「巴園」との違いを指摘し、「橘」のほうが「巴園」より両曲の原拠というべき『玄怪録』に近いとする。「太子」については、先行する「守屋」と

「上宮太子」との関係を検討して「上宮太子」を踏まえた作品であろうとする。

第五章「「猩々物」の能の成立と展開」はおびただしい数の作品が伝わる「猩々物」の能についての考察である。まず中世から近世までの間に作られた「猩々物」の能二六曲について、ワキの人物設定などをめぐって分類、整理し、その展開を概括し、また成立時期による設定の違い、「猩々物」の能の作者、上演の実否などについて述べている。「猩々」の典故については、すでにいろいろの書物が指摘されたが、筆者はシテ猩々の海中に住む獣で、酒を好み、酔って舞を舞うという属性が『墨莊漫録』、黄庭堅の詩などに認められるとして、その典故の淵源は漢籍に求めることができるとする。ただし、漢籍における多くの猩々説話にはシテ猩々の持つ祝言的な属性がないことを指摘し、その要素は祝言能という類型に従った「猩々」における付加であろうとしている。

第六章「近世における唐事の能の展開——怪異物の出典を中心に——」は、近世の中国題材の能のうち、怪異物である「鸚鵡鳥」「根元鶉」「人参」「螺女」「農竜」などが取り上げられ、これらの典故として『開元天宝遺事』『湖海新聞夷堅統志』『庚溪詩話』『本草綱目』『搜神後記』『史記』などの文献を指摘している。

第七章「能における元曲影響説——その経緯と背景——」は、能の元曲起源説（元曲影響説）について、近世前期ころにおける

その形成と今日までにおよぶその継承あるいは批判の歴史をたどった研究である。また、その背景についても考察している。

神霊の音づれ

——太鼓と鉦の祭祀儀礼音楽論

朱 家 駿

信仰と音楽はともに人類文化のもっとも普遍的、本質的な部分であると同時に、両者は不思議なほど密接に関連している。両者はともに人間の感情に関わる象徴行動であり、虚構的、精神的、主観的な性質をその実在と活動の原理としている。それゆえ、音楽や信仰、宗教は象徴性、神秘性に富み、奥深い文化的な意味の世界を担っている。その象徴の世界はそれぞれ独自の特性をもつとはいえ、多くの場合、両者が密接に絡み合って表出される。

そもそも、いわゆる自然民族や無文字社会の人々が恐ろしくて不可解なものを超自然的存在として認知する現象の中に、音を伴うものが実に多い。風雨、雷鳴、地震、火山、津波、木霊や松籟、水のせせらぎや鳥の鳴き声。これらはすべて神の仕業、あるいは神霊自体の現われであるとすれば、それに伴う音現象はまさに神

霊顕現の印であり象徴であろう。視覚によって捉えることのできない神はどこからともなく現われ、またどこへともなく消えていくことを、人間はそれに伴う音によって聴覚的に捉えざるを得ない。そして、呪術的に音によって神を呼び寄せて神意を伺ったり、または神を喜ばせて神のご加護を願ったり、或いは神を送ったり悪霊を鎮めたり祓つたりするところに、音楽の一つの原点がある。

したがって、音楽の本質や機能、象徴性と意味、形態と様式、および音楽と宗教、信仰との関係などを正しく理解するには、祭祀儀礼音楽についての考察がもつとも重要な作業といえよう。

本研究は日本における種々の祭祀儀礼を事例として、太鼓と鉦に焦点をあてながら、それを本来祭祀儀礼を模写し図像化した古代漢字と照合して考察し、日本そして漢字文化圏における祭祀儀礼音楽を究明しようとする。

第1章「祭祀儀礼音楽研究序説 — 漢字文化記号論のために」では、研究の対象と目的、理論と方法、および研究の範囲と論文の構成について概述し、独自の「体系的かつ総合的な研究」方法や、「漢字文化記号論」などの理論的枠組みを提示した。

第2章「神霊の音づれ — 祭祀儀礼音楽の機能と本質」は、能登半島を中心とする音探索の体験を中心に、日本の各地で観察した民俗信仰的、宗教的な音楽行動と、甲骨文、金石文などの古代文字、言語などと照合して考察した。その結果、神という字はも

とも稲妻の象形であり雷神を指し、音は鈴(りん)、鈴(すず)、鉦といった音具から発せられるものが原初的なものであり、雷神などの神霊の「音づれ」を促すものであると論じた。

第3章「水の神、音楽の神 — 祭祀儀礼音楽の源流と伝統」は、主として中国の文献資料に基づき、龍や鱉ないし蛇などの水の神と、雨乞を始めとする種々の祭祀儀礼の主役である巫について論述した。水の神である龍は太鼓や音楽の神でもあることを指摘すると同時に、音楽、舞踊、歌などは巫による雨乞などの儀礼に起源をもつことを明らかにした。

第4章「祭神、祭礼の諸相 — 祭祀儀礼音楽の形態と様式」は、姫路市射楯兵主神社の湯立て神楽や津軽地方のイタコの口寄せ、さらに大阪の天神祭に見られるだんじりや催し太鼓など、日本各地で調査を行なってきた巫俗儀礼や祭祀芸能を取り上げた。これらの事例を通じて、大国主命は巫の性格が強く、天神の菅原道真にも雷神としての一面があり、両者ともに水神の性格をもつことを明らかにしながら、日本、ひいては東アジアの祭祀儀礼音楽の形態と様式を論じた。

第5章「楽の器 — 祭祀儀礼音楽の音具、楽器」では、太鼓と鉦をはじめとする祭祀儀礼音楽に使われる種々の音具、楽器を概観し、その形態と様式、機能と性格、および歴史的伝承と受容、変容などを論じた。

結論として、東アジアの自然、風土が人間に稲作の生活様式を規定しているため、龍の文化が生まれ、人間が龍の音楽をすることになる。水は命の源であり、それはいかなる自然的、文化的な規定よりも次元の高いものである。音楽および舞踊、歌などの諸芸能が主として巫による雨乞の儀礼に由来するものであるという仮説があたっているとすれば、人間の音楽行動はつまるところ、人間の生の営みそのものにほかならないといえよう。

中世説話物語文芸の形成と展開

近本 謙介

本論文の内容は以下の通りである。

序章

第一章 鎌倉期説話物語形成の諸相

第一節 『続古事談』漢朝篇説話とその周辺

第二節 鎌倉期説話集と朗詠注

第三節 『松浦宮物語』の構想と周辺の文芸

―長谷・住吉から弁少将の造型に至る―

第二章 草子・絵巻の形成と展開

第一節 『咸陽宮』絵巻伝本における物語化の方法

―その記述と素材―

第二節 『不老不死』成立以前

―耆婆説話の流伝に関する覚書―

第三章 古今注と説話

第一節 三手文庫蔵『古今秘抄』について

第二節 『古今秘抄』と中世の知識世界

第三節 『古今秘抄』と中世文芸

第四章 浄土宗談義本と中世文芸

第一節 中世仏教説話の受容と展開

第二節 浄土宗談義の聞書

―『宸翰英華』所収後奈良天皇法文聞書をめぐって―

第五章 天台宗法華直談と中世文芸

―日光輪王寺蔵『直談因縁集』の研究―

第一節 日光輪王寺蔵『直談因縁集』について―

第二節 物語形成の場としての直談

第三節 『直談因縁集』の『沙石集』受容

第四節 『直談因縁集』の『三國伝記』受容

第五節 『直談因縁集』と中世物語・語り物文芸

第六章 西行伝承の形成と展開

第一節 談義注釈と物語

— 略本系『西行物語』について —

第二節 西行邂逅譚の系譜と中世文芸

〔資料紹介〕 三手文庫蔵『古今秘抄』

チェコ民族の精神と音楽文化の歴史的展開

内藤 久子

本論文は、ヨーロッパ芸術音楽の発展史の中で、中欧の小民族であるチェコ人がいかなる「音」ないし「音楽」の表徴を通して、自民族の「文化的アイデンティティ(同一性)」を獲得する方向へと進んでいったのか、その足跡を辿りながら、チェコ民族の音楽文化の系譜を「地方主義 (Regionalismus)」や「ナショナルリテイ (民族意識・民族性)」といった観点から論じるものである。すなわち、民族の意識や精神に深く照らした音楽文化の歴史的展開という視座から、ヨーロッパ地域での「民族」と「音楽」の結びつきを問いかける、いわば「民族文化論的」な視点に立った音楽史研究への一つの試みであり、小民族の側から西洋音楽の歴史を

読み直そうという事例研究でもある。全体は、「序論」と「結び」に加え、三部・八章から構成されている。

中欧に位置する「チェコ」の音楽文化の歴史を一言で特色づけるとすれば、まず西欧文化の影響が色濃く表れている西部のボヘミア地方と、東方の純スラヴ的特質に彩られた東部のモラヴィア地方、この二つの文化圏に根ざすフォークロアを基層文化として、中世やルネサンスの時代からまさに永続的な発展を遂げてきたということになる。西スラヴ民族に属するチェコ人は、その長い多難な被支配の歴史を通じて、地方に息づいた民俗文化を密かに保護し温存しながら、一八世紀末以降のヨーロッパ・ナショナルリズムの波に乗じて「フォークロアに基づく民族文化の形成」というJ・G・ヘルダーの思想に触発され、一九世紀後半になって漸く「チェコ国民音楽」の樹立に向けた独自の動きを展開していった。このようなチェコ音楽の系譜を、本論では以下の三つの段階に分けて考察している。

最初の段階(第一部)は、いわゆるチェコ音楽の伝統的な響きの原型が構築された時期で、これを「伝統の時代」・チェコ音楽におけるフォークロア受容の「揺籃期」として全体の中に位置づけた。考察のまず第一歩として、芸術音楽に深く浸透していると見られる民俗音楽の特質を地域的に明らかにした後に、一八世紀末頃までの伝統的なチェコの宗教音楽や宮廷音楽、それに当時、地方の

音楽活動を先導していたカントルらによるヘパストラルムや民俗舞踊の編曲等の作品を分析し、民俗音楽の初期の影響について検証してみた。

つづく第二の段階（第II部）では、元来「国民音楽」というものが、歴史的事象を通して、何よりも「一民族の意識に基づいた合意と解釈」によって認識されるという前提のもとに、この時期を「意識化の時代：チェコ国民音楽の樹立に向けて」と称した。

ここではチェコ民族に固有の音楽文化がどのように確立されていったのかを「創作」と「受容」の両面から論じるとともに、「国民様式」の存在と決定の問題に言及していった。こうして「チェコ・ナシヨナリズム」の音楽現象が、基本的にはB・スメタナとA・ドヴォジャークに代表されるような二つの方向性から、つまり西欧の新ロマン主義を志向しつつ具象的な標題音楽の構想のもとに「チェコ近代音楽」を樹立しようとする道と、モラヴィアやスラブ起源にまで及ぶ汎スラブ主義的なフォークロリズムの音楽、といった双方から特色づけられることを分析的に明らかにした。さらに近代への移行という時代の脈絡の中で、二十世紀前半にみられるような確かな理念を伴う「国民音楽」樹立の動向について、二人の作曲家に対する評価をめぐる論争を手がかりに、「国民楽派」の成立の背景を包括的に考察していった。

最後の第三の段階（第III部）では、そうした十九世紀の「ナシヨ

ナリズムの音楽」からさらに「地域のナシヨナリズム（即ち、モラヴィア・エスニシティ）」へと向かう一連の動きに注目し、二十世紀前半の音楽現象を「新たな意識化の波：ナシヨナリズムの音楽の質的変容」という視点で捉えてみた。考察の対象としては、モラヴィア地方出身のL・ヤナーチェクが示した「モラヴィア・フォークロリズム（民俗主義）」の音楽からA・ハーバによるモラヴィアの前衛音楽までを取り扱っている。

「国民音楽」の現象はこのように、まず文化の担い手の意思に基づき、音による多様な「民族性」の表徴を伴いながら、常に「時代」という脈絡を写像して複雑に展開しつづけるものと思われる。そこに描かれるのは、民族の精神の葛藤の歴史であり、精神的表象としての音楽文化の歴史である。それはまた同時に、芸術文化の地平における「国民様式」の存在の意味を問い掛けるものであったと考えられる。

近代中国語敬語体系の研究

——日本語・英語との対照を視野に入れて——

彭 国 躍

対人関係の機能は、伝達の機能とともに自然言語が持っている最も重要な機能の一つである。言語の対人関係の機能についての研究は、これまで主に敬語という言語研究の中の特定の分野において行われてきた。

日本における敬語研究は、山田孝雄（一九二四）以来、約七〇年間絶え間無く続けられ、その間数多くの敬語理論が展開された。日本の敬語研究は、一つの理論モデルとして今日の世界の敬語研究に寄与するようになった。一九七〇年代後半からは、英語社会における敬語研究がスタートし、BrownとLevinsonやLeechなどによるポライトネス理論が相次ぎ打ち出された。以来、諸言語の敬語の個別研究が続出し、敬語の対照研究や普遍理論の模索も始まり、より多くの言語の敬語現象の記述が求められるようになった。このような流れの中で伝統的な中国語の敬語体系の記述研究はますます重要性を増してきたと言える。

本研究の目的は、日本語と英語の敬語研究の成果を踏まえ、それらとの対照を視野に入れながら、近代中国語の敬語、その組織的メカニズム、対人関係の認知モデル、社会言語学的特徴などについて記述するところにある。

組織的メカニズムについて

日本語の敬語は特定の形態によって記号化されたダイクシス体系に属し、英語のポライトネスは発話行為の調節機能としてのストラテジー体系に属する。それらと比べて、近代中国語の敬語は、語彙の概念的意味における価値含意を介してメタファー的に伝えらるという特徴を持っている。本研究では、これまで記述されたことのない近代中国語のメタファー型敬語の意味構造とその体系像を明らかにした。

対人関係の認知モデルについて

言語は人間の精神活動の所産である。言語研究は人間の精神活動の方向づけや支えとなっている文化的背景を無視することはできない。本研究では、認知意味論の視点を導入し、中国文化における伝統的な世界観、価値観、倫理観と関連づけながら、近代中国語敬語の人間関係の認知モデルを構築し、文化と言語との関係を、より明示的、具体的、体系的に展示した。

社会言語学的特徴について

本研究では、近代中国語敬語の運用的特徴を解明するために、

社会言語学的なアプローチを導入し、近代口語小説を対象に、特定の発語がかかわった具体的な人間関係を調査することにより、身分、年齢、性別などの社会的属性が敬語運用に与えた影響を考察した。

本論文は、第1～4部によって構成される。

第1部では、研究の目的、対象、時代及びデータについて説明し、方法的背景や論文構成などについて概述する。

第2部の第1章では、敬語記述のための理論的な枠組みを論じる。ギリシャ、ローマに起源を持つ西洋文化とオーストラリア土着のジルバル文化における世界カテゴリーのモデルとの比較を通して、中国文化における伝統的な関係第一次性の陰陽カテゴリーのモデルを提示し、陰陽モデルに基づいて認知された世界像での人間関係の捉え方、そしてそれに基づく世界観と礼の倫理観と言語の対人関係機能を担う「敬辞」との間の相関関係を明らかにする。第2章では、メタファー型敬語の記号過程、意味ネットワーク、類似性、文脈条件などの諸問題について議論を展開する。従来個別現象として捉えられていた敬辞の諸概念「令、貴、尊、高、大、賢、清、明、龍、鳳、玉、金…/劣、拙、賤、下、小、愚、貧、寒、犬、蝸…」などを経験的基盤と陰陽モデルに基づいて一貫性をもって組織化した。第3章では、敬辞体系内での下位区分とその例証(語例、例文)を提示する。

第3部の第1章と第2章は、敬辞使用の実証的研究である。第1章では、親族名称を中心に敬辞とその被修飾成分との間に存在する複雑な共起関係を検証し、敬辞には敬意度の差に基づく価値序列が存在することを明かにする。第2章では、敬辞の使用と人間関係の社会的条件との相関性について考察する。

第4部では、中、日、英語の敬語現象を比較し、敬語表現の類型分析を行う。抽出された三つの敬語類型を一四の言語と九つのクレオールにおける敬語現象に適用させ、世界の敬語の類型論的分類の可能性を探る。

富永伸基論

——一八世紀懷徳堂周辺の知的世界——

宮川 康子

富永伸基(一七一五—一七四七)は近世大坂の学問所懷徳堂が生んだ異才である。明治になってから内藤耻叟や内藤湖南らが、山片蟠桃、三浦梅園とともに、近世思想上、真に独創的な思想を展開した大天才として顕彰した。それ以後伸基の思想は、近世思想史の文脈から切り離された天才の所産とみなされることにな

る。とくに「加上」や「三物五類」の説と呼ばれるテキスト分析理論は、学問方法論の先蹤として、近代から高く評価されてきた。本研究は、仲基の思想を、天才仲基という個人に還元して理解する内在的立場からではなく、当時の思想状況や、言説規制のありかたのなかでとらえなおし、そこから懷徳堂周辺の知的ネットワークの特質を明らかにしようとしたものである。

第一章は、いままでその存在が知られていながら、検討されることのなかった仲基の「論語徴駁説」を中心に、仲基が懷徳堂を中心とした反徂徠のネットワークのはじまりに位置していたことを明らかにする。「論語徴駁説」は、仲基の友人井狩雪溪の『論語徴駁』に書き入れられた仲基の所説である。今回私は、大阪大学懷徳堂文庫に収められている『論語徴駁』写本を検討した結果、そこにいままで知られていた二二条以外に一五〇条以上の書き入れが混入しているのを発見した。これらが皆仲基の所説であるという仮説を論証する過程で、同時に、徂徠を批判する作業が、仲基の思想を形成するうえで重要な役割を果たしていたことが明らかになる。

第二章では、このような反徂徠という視点から、あらためて「加上」や「三物五類」の説にみられる仲基の言語論を検討する。仲基は、古へを規範とする徂徠の古文辞学を、今へと転回させることによって、語用論的言語観を獲得する。言葉の意味の歴史的

変化は、本来の正しい意味からの乖離としてではなく、新しい意味の生成としてとらえられ、「言葉は人に使われることによって意味を得る」という新たな言語（テキスト）への視点がそこに生まれるのである。

第三章では、仲基の発案によって、友人の僧日初が書き上げた『日本春秋』をめぐる、仲基が属していた知的ネットワークにおける歴史意識について考察する。彼らに共有されていた日本通史を書くという歴史記述への関心は、やがて懷徳堂の中井履軒の『通語』、竹山の『逸史』そして頼山陽の『日本外史』へとつながる稗史の系譜へとつながるものであった。徂徠の歴史意識との対比のなかでその歴史意識の特質を考察する。

第四章では、仲基の「誠の道」の主張が、実は徂徠の「先王の道」へのアンチテーゼとして言い出されたものであったという第一章での発見をふまえて、従来あまりにも通俗的であたりまえすぎるとして消極的に評価されることの多かった「誠の道」の内実が、「あたりまえ」という万人に共有される知的認識能力を強調するためにあるということ明らかにする。それは何によって学問の、あるいは道の正当性を主張するのかというきわめて認識論的問題設定のなかにあるのである。古代先王に道の基準を置く徂徠にたいして、仲基は人々の「あたりまえ」に「誠の道」を見いだす。懷徳堂における「誠」の理解との比較を通じて、仲基の発

見したこの「あたりまえ」こそが、懷徳堂の知的世界の認識基盤となつてゐることを明らかにする。

仲基はけつして孤高の天才ではなかつた。既成の身分秩序のなかには生きる場所を得られない「無位の君子」としてではあれ、彼は多くの友人たちと知的関心を共有し、共同作業のなかから自らの思想を形成していった。彼が抽出した学問的方法論と、あたりまえの認識論は、懷徳堂周辺の知的世界の認識基盤を分節化したものであるといつてよいだろう。そこに見いだされるのは歴史的に相対化された自らの視点、認識論的反省にもとづく視点の二重化である。

神から人への石見神楽

——機能と伝承の変化の分析——

テレンス・A・ランカシャ

石見神楽は島根県で伝承されている主に演劇的な神楽であり、隠岐神楽、出雲神楽、備中神楽、備後神楽、安芸神楽、周防神楽、長門神楽、という中国地方の様々な神楽と並ぶ芸能である。

「神楽」そのものを定義するのは容易なことではないが、石見

神楽の場合、採り物の舞や演劇的な演目を通して神を迎え、神を楽しませるといふのが神楽の機能の一つであると地元で考えられてきた。しかし、石見神楽の歴史や現状を見ると、その神楽は大きく変化し、様々に異なる役割を果たすようにもなつた。

この論文では石見神楽に見られる様式上の変化とそれに伴う機能の変化に焦点をあて、特に音楽と詞章の伝承プロセスから生じた変化を詳細に検討する。論文は八つの章で構成されている。

第1章と第2章では石見神楽の背景と変遷の跡をたどる。石見神楽の起源は不明であるが、様々な台本や保存されている仮面から、少なくとも一六世紀にさかのぼることができる。だが通説としては、石見神楽は東部の出雲神楽と関係が深く、特に松江市の近辺にある佐陀神社の神能が西部の石見神楽だけではなく、他の地域の演劇的な神楽にも影響を与えたといわれている。本田安次が提示する神楽分類での出雲系神楽という用語はこの概念から生じたものである。

しかし、佐陀以外の出雲神楽や石見神楽の演劇的な演目の構成やそれに伴う音楽を検討すると、佐陀神能の影響はむしろ薄く、神能は独自のスタイルをもつ神楽である。とはいえ、出雲神楽や石見神楽の演劇的な演目の様々な要素がかなり統一されているのに対して、佐陀神能のみ異なつたかたちで表現されている。この意味で出雲系神楽という用語の是非は問われるべき概念である。

第3章では石見神樂の上演者を検討する。大まかにいうと二つのグループの上演者がいた。すなわち神職と民間人である。明治以前、神樂は神職または杜家によって上演されたが、一八七〇年に神職による演舞の上演が政府によって禁止された。この時点から、石見神樂は一般の民間人にも上演されるようになった。

この二つのグループから石見神樂の構成や内容が様々に影響を受けた。とはいえ、演目の内容を検討すると、陰陽道や仏教などの思想が見られるので、陰陽師や山伏が神職や神樂の上演者になった可能性があり、様々に神樂の内容に影響を与えた。

第4章は演目の内容の概要を提供する。

第5章では石見神樂の音楽を検討し、おもに神や重要人物の出現を伴奏する「真がた」という曲を分析する。石見神樂の音楽は口頭的に伝承され、楽譜は一切使われていないので貴重な伝統である。この伝承のプロセスからどのような変化が生じたのかが分析の目的である。

第6章では神樂の詞章を検討する。過去において詞章は口頭的に伝承されていたと地元で言われているが、口頭伝承から生じた様々な誤りを訂正するために一八世紀から二〇世紀にかけていくつかの神樂台本が発行された。しかし台本があったとしてもどの程度上演者が台本を使ったのか、疑問がある。口頭伝承と台本の関わりを検討する。

最後の第7章と第8章は、石見神樂において変化を遂げてきた様々な役割を検討する。神樂が神社の儀式であり、国学の活動を反映していることもあった。石見神樂は特に民間人によって上演されるようになってから、ショー的な芸能となってしまった。このため石見神樂は地元の娯楽として大いに成功した。だが、現在のかたちの石見神樂が昔からの伝統を代表しているかどうか、現実に神樂であるかどうかといった疑問が浮かび上がってくる。

言語変異に対する意識の社会言語学的研究

ダニエル・ロンゲ

社会言語学の重要なテーマの一つに「言語意識」に関わる研究領域がある。これは、言語体系ないし言語の運用に関わる人々の意識（言語変種や具体的な言語変異形への評価、判断、あるいはその使用を話者のアイデンティティとの関係）を研究する分野である。

本論文は、「言語意識」の問題を、現代日本語を対象として、総合的かつ本格的に考察するため、実態調査や実験で得られたデータに基づいて分析を行なったものである。全体は3章で構成され

ている。各章において、言語変異に対する意識がどのように言語コードの使用、言語運用の変化、あるいは言語変種の使用範囲の認知と関連しているかを社会言語学的に分析する。

第1章(「言語行動と言語意識」)では、言語コードの使用に対する意識をめぐる問題を追究する。そこで、まず、言語に対する規範意識と言語運用とのかわりを考察する。日本における標準語と方言といった、いわゆる二言語変種の使い分けの実態を概観し、それに関する術語を整理する。ここでは、「疑似標準語」という概念を提唱し、特に関西圏の場合を事例としてさまざまな検討を加えている(第1節)。次に、日本人の対外国人談話(フォリナー・トーク)における具体的な変異形を記述し、分類した上で、フォリナー・トークの特徴を含む録音資料を被験者に聞かせ、様々な側面からそれぞれの談話に対する意識や評価を計った。その結果、フォリナー・トークに対する意識は、言語形式的な特徴よりも、機能的な特徴に左右されやすいという結果をはじめ、実態の詳細なところが明らかになった(第2節)。

第2章(「言語変容と言語意識」)では、まず、二つ以上の言語変種が接触した場合に見られる言語意識と言語行動を、移住者の体験談から追究し、問題点を明らかにする。ある方言形式を京阪で使用した結果、不快を感じた移住者の経験や、京阪地方の話者が抱いている東京方言や標準語への対立意識を分析した(第1節)。

第2節で、移住者の方言受容の問題を追究する。日本全国から、大阪または京都にきた大学生は京阪のことにばに対してどのような意識を持っているか、また、どのように京阪の方言に対応しているかという問題をとりあげた調査結果から、京阪という方言意識に関して非常に特殊な生活地域の性格と、大学生の出身地のもつ様々な性格について考察する。第3節では、移住者の性別及び生活地域(大阪と京都)の違いに注目しながら、方言意識と方言受容との関係、さらに、方言受容の動機や過程について考察する。最後の第4節では、因子分析を用い、話者が自分の社会的属性に対して抱いている意識(アイデンティティ)がどのように二言語変種の使い方に影響するかを検証する。

第3章(「言語使用領域に対する意識」)では、まず、いわゆる「方言区画」の試みを概観した上で、新しい研究の方法論を提唱する(第1節)。そして、この新しい方法論に基づいて作成した「方言認知地図」の概要を紹介する。この「方言認知地図」による成果の一部として、ここでは、「標準語」の認知領域、およびそれと関係する言語的・社会的要因が分析され、「関東弁」、「東京弁」の認知領域との違いが明らかにされている。具体的には、関東、愛知、岐阜、石川、関西、広島、福岡、鹿児島の8地域のインフォーマントのデータの分析から、それぞれの地方に住む人々にとって「標準語」という言語変種が話されている領域が違う

ということを明らかにする。また、「関西弁」の認知領域とその
細分類が示され、その認知領域と関係する言語的・社会的要因な
どが分析されている(第2節)。